

インド ハラハラドキドキ旅行

日本大学 村井佳世子

急に時間ができて大学生の娘とタージマハールを見に行こうということになり、何の予備知識もなくインドを訪れたのは3年前の春だった。機内でガイドブックを開き個人旅行にはトラブルがつきものとするも、後の祭。無謀な女二人のドキドキハラハラ旅行が始まった。

デリーの薄暗い空港に着くと生温かな湿った空気が肌をなでる。事前に支払いをし、クーラーのない薄汚れたタクシーに乗り込む。驚いたことに、デリーでは車が通れそうな隙間があると我先に割り込もうとするので車は車線に関係なく走っている。あちこちでぶつかりそうになるためクラクションが鳴っている。インドに来て交通事故にあっては大変と内心ハラハラしたが、平気な顔をしている運転手の様子では日常的なことらしい。信号で車が止まると、身体の不自由な大人や貧しい身なりの子供たちが車と車の隙間をぬって近づいてきて車の窓から手を突っ込もうとする。物乞いに構うなと運転手に言われる。インド到着後30分足らずの強烈な体験でたちまちドキドキである。

翌朝、車をチャーターしてタージマハールのあるアグラへ向けて出発。砂埃をあげる田舎道を揺られること5時間。道中の街路や農業地帯の光景は、インド初体験の身には新鮮だ。とにかく人が多くて活気がある。裾まで引きずるサリーに身を包んだ女性たちが暑さの中で畑を耕している。

途中立ち寄った観光地には、それぞれ運転手の仲間のガイドが待機。その度に案内料は交渉次第で、ぼられるのではと構えたが、彼らはただ生活の糧を稼ごうと必死なのだということがわかった。

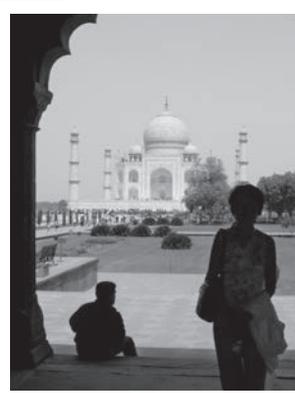


タージマハールの前で▶

運転手が案内してくれた一見普通の大家食堂の食事は、いずれも非常に美味。「一緒に食べないの」と運転手に尋ねると、「我々はこんな高級な所では食べられない」と笑って言う。食堂のトイレではティッシュを差し出す身分の低い女性にチップを求められどぎまぎ。今更ながら日本とは比べものにならない貧富の差と通貨価値の違いを思い知らされた。

さて肝心のタージマハールは、そのスケールと建築様式に目を見張った。これが17世紀の王妃の墓なのだから驚きだが、ここでも観光地に多い物乞いと土産物売りに遭遇し、歴史に残る贅沢な建造物と現代社会の一面とのギャップに考えさせられる。折しも祭日でインド人の家族連れであふれる光景には心が和んだ。さながら伊勢神宮への家族旅行といったところだ。

デリーでは、遺跡や歴史的な名所や独立運動の指導者ガンジーが暗殺された場所を訪れたが、いつの間にか市街地の喧騒や街中のクラクションの音も気にならなくなっていた。そこにはインドの活気ある人々の生の生活があった。不用意な親子二人の旅は、こうして無事幕となった。



表紙写真
について

フィレンツェにて

東京都立小石川中等教育学校 望月尚子

写真は、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ教会。9世紀頃にこの地にあった礼拝堂が起源。13世紀に修道士たちが教会を建て、人々の救済のための看病部屋を作り、庭にはハーブを栽培し、薬剤を調合していた。それが現在、サンタ・マリア・ノヴェッラ薬局として、近くで営業している。800年以上続く世界最古の薬局である。自然治癒を目指し、ハーブ製品を作っている。入るのを拒んでいるような、がっしりとした扉を開け、人気がない薄暗い廊下をぬけると小部屋がありその奥の部屋がようやく売り場らしい。思いのほか客はたくさんいるが、日本のように、品物が並んでいて商品の説明が書いてあったりはしない。近寄って来る店員もいない。壁に並ぶガラスのケースに、商品は美術品のように展示されている。日本と全く違う雰囲気呑まれてしまいそうだ。

フィレンツェのもう一つの象徴であるドゥオモ（大聖堂）のクーポラ（楕円状の天井部分）に上ろうと、外の行列に並ぶこと1時間。やっと中に入れたと思ったら、一人一人が通るのがやっとの石段を490段も上がらなければならなかった。息をきらしながら、登りきった先に見えた街並みの美しさは圧巻だ。赤茶系の建物の波間に教会の尖塔がそ

びえ立つ。空の青さとのコントラストが美しい。「冷静と情熱のあいだに」という恋愛小説の舞台で、映画化もされた。その美しい街並み全体を、アルノ川をはさんだ対岸から眺めることができるのがミケランジェロの丘。そこを目指して、どこまでも続く坂道を、汗をふきながらひたすら足を運んだ。でも、ドゥオモの時と同じだ。到着して目に飛び込んできた光景。川の向こうに広がる中世の街並み。苦労した後のさわやかな達成感とともに、決して忘れることのできない光景となった。

夕方、サンタ・マリア・ノヴェッラ教会の前の広場で夕涼みをしていると、「日本人ですか」と、バックパッカーの日本人青年が話しかけてきた。聞けば東京の大学生で、もう一カ月もヨーロッパを旅しているとのこと。周囲の友人はあまり海外に出ることに興味を持っていないので一人旅なのだそうだ。私たちがレストランで食事をしていると彼が入ってきた。バックパッカーも最近は贅沢になったな、と感心。私がバックパッカーしていた頃は、宿泊はユースホステル、昼食には、ユースで出た朝食のパンをとっておき、夜はスーパーで買った食材で安上がりに済ませていた。そういえば、彼は、宿泊もユースではなく、ホテルだと言っていた。でも、「もっとハングリーでないと」、なんて説教じみたことは言わない。どんな形でもいい、彼のように外に飛び出そう、いろいろ見てやろう、という若者がもっと増えてほしい。